北信教育事務所だより

第５号
令和３年 11 月 16 日

～子どもに発し、子どもに還る　学校づくり・授業づくり～

共に拓く

２年ぶりに開催された教育課程研究協議会は、感染症対策を講じ、地区ごとに様々な工夫が施され、授業の実際から学び合う一日となりました。

上高井地区

須坂市立小山小学校
国語・２学年
単元名「さくせんかいぎをしよう」

＝注目したい点＝

1 自分たちの話し合い（さくせんかいぎ）の様子を撮影して、話をつなぐことができたか自己評価する点
2 教師が、本時終末に資質・能力を育成した児童の具体の姿をとらえ、指導と評価に生かしている点

＝当日の様子＝

十分な感染症対策が取られた中、通常開催で授業が行われました。グループの話し合い活動で話をつなげられずに困っている友だちに対して、話し方の例を示すＳさん。友だちの追究を支えようとして示すその具体例が自ずと、互いに考えを深め合う話し合いのよさについて考えるきっかけになっていました。

上高井地区

須坂市立東中学校
特別の教科　道徳・２年
主題名「人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること」

＝注目したい点＝

1 ICT を活用して、二つの立場や考えを視覚化することで、考えを伝え合うきっかけをつくった点
2 中心発問につなげる補助発問（問い返し）をすることで、命に対する考えを深めていった点

＝当日の様子＝

「命の恩恵を受けるということは？」をテーマに、教材「いのちをいただく」を使用して考えました。ペットのように愛情をこめて育てていた家族の一員である牛を売った家の女の子の気持ちの変容とその祖父の孫への願いに思いを寄せる学習でした。子どもたちが生命に対する感謝と謙虚な気持ちをもって生活しようとするきっかけになりました。

長野・上水内地区

長野市立豊野東小学校
生活・１学年
単元名「おもちゃとなかよし」

＝注目したい点＝

1 単元全体を交代で参観して、子どもの学びの道筋を全職員が探っていった点
2 空間、時間に余裕をもたせたり、支え合う仲間を大切にしたりして、子どもが夢中になる支援があった点

＝当日の様子＝

研究協議会中止に伴い、校内の参観授業を１時間に限定せず、単元全体を公開することにし、全職員が都合のいい時間に参観して研究会を行うことにしました。一人の子どもの学びの様子が、単元導入から終末まで明らかとなり、授業を「内容のまとまり」の視点で考えることにつながりました。

単元を通して育成を目指す資質・能力について意見交換する研究会となりました。

長野・上水内地区

長野市立更北中学校
数学・１学年
単元名「変化と対応」

＝注目したい点＝

1 主体的に学習に取り組みたくなる単元展開、教材の工夫をしている点
2 １人１台端末の効果的な活用の仕方を探ろうとしている点

＝当日の様子＝

研究協議会の中止に伴い、校内研究会が実施されました。教科会ごとに、事前に撮影した関数の導入の授業動画を視聴。授業研究会では、１人１台端末を用いることのよさとともに、端末上で実験・操作した結果を表に整理するとよいことや、変化や対応に着目し考察すると単元の学習のねらいにつながるという意見などが、活発に出されていました。

更埴地区

坂城町立南条小学校
外国語活動・３学年
単元名「Unit7 This is for you」

＝注目したい点＝
1 コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じ、慣れ親しんだ表現を使って、相手を意識したやり取りをしていた点
2 友だちの気付きや考えを共有するために、振り返りの場面でICTを活用していた点

＝当日の様子＝
「運動会への招待カードを完成させる」というゴールに向けて、お店屋さんとお客さんに分かれてやり取りしました。「What do you want?」「～,please.」を使って、欲しい飾りの形や色を聞いたり伝えたりしました。「お母さんピンク色好きだから…」という、受け取る人が喜ぶ姿を想像しながら、カードを完成させる姿がありました。

更埴地区

千曲市立戸倉上山田中学校
特別支援教育・２学年
単元名「扇の的（国語）」

＝注目したい点＝
1 配慮が必要な生徒に対する合理的配慮と評価方法を本時の展開の中に位置付けた点
2 動画で情景を確認したり、発表者のプリントをモニターに映したり、全体共有のためにICTを活用した点

＝当日の様子＝
信州型ＵＤを基に、どの生徒も学びやすくなるための「戸上スタンダード」を策定し、授業づくりを行いました。読み書きの負担を軽減したプリントを用意したり、情景を視覚的に再現したりしました。仲間の意見を集める場面では、授業者の計画的な机間指導により、どの生徒も最後まで安心して情報交換することができました。

中高・飯水地区

山ノ内町立南小学校
理科・５学年
単元名「生命のたん生」

＝注目したい点＝
1 メダカの卵の成長について、自分と友の卵、過去の観察写真などを丁寧に比較することができた点
2 「根拠のある予想や仮説を発想する力」の育成につながる思考場面となっていた点

＝当日の様子＝
卵の成長の順番を考える場面で、既習と関係付けた友の考えをもとに、自身の過去の観察写真を比較することを通して、順番を判断する基準を見いだしました。「根拠が重要だよ」など、子どもが見方・考え方を働かせることができる教師の支援により、卵の変化に着目して時間の経過と関連付けて調べる姿がありました。

中高・飯水地区

中野市立中野平中学校
社会・１学年
単元名「中世の日本」

＝注目したい点＝
1 課題解決に向け、教師がICTを利用して追究を促す資料を配布するように工夫していた点
2 考えの可視化や共有、考えを深めていく手だてとしてICTを活用していた点

＝当日の様子＝
授業場面に応じて、プレゼン資料作成アプリ等を用いて学習する生徒の姿をVTRで視聴しました。
課題解決に向けて必要となる資料を、教科書や資料集とともに、ICTを用いて収集し、“学びの道具”としてICTを活用する生徒の育ちと、生徒の思考を深める活用のあり方について討議しました。

先生方と授業の具体について語り合う場を取り入れ、互いの実践から学び、めざす子どもの姿について、さらに追究していけるように進めていきたいと思います。

上の文は、第２回研究主任研修会(９月 16 日実施)に参加された研究主任の先生の振り返りです。オンラインで総勢 120 名の研究主任の先生方が参加され、充実した研修会となりました。今回は、実践を発表していただいた４校の取組の一端をご紹介します。

牟礼小学校　「考える力を育む授業づくり」　研究主任　徳永　幹子 先生

○子どもの姿を全職員で捉え、その姿を基に目指す子どもの姿を共通理解し、研究をスタート
○日常的に子どもたちの姿を語り合う時間を設け、子どもと一緒に職員も取組をアップデート
○問題発見の後、解決の見通しをもつような場面を取り入れた授業展開
○各教科・領域の学習での振り返りの時間の位置付け

埴生小学校　「よりよい自分を創っていく力を育む実践」　研究主任　大日方政之 先生

○４つの研究部会で、「豊かな児童理解」「授業の導入を大切に」「子どもの姿に立ち返る」「主体的な子ども」といった共通の視点での研究推進
○子ども理解を基盤に、素材との出合い、授業の導入時の発問に焦点を当てた授業づくり
○各教科・領域で、子ども自身が自分の変化や成長を実感できるような振り返りの時間の位置付け

市立長野中学校　「未来と社会につながる探究学習」　教務主任　宮﨑　忠 先生

○系統立てた ３ 年間の「総合的な学習の時間」のカリキュラムと高校へのつながりを意識した実践
○「総合的な学習の時間」の評価の観点を明確にし、参加・体験を重視した探究学習の実践
○生徒の学びの段階を「①とらえる　②整理する　③深める　④つなぐ」と位置付けた取組
○思考ツールの活用による生徒の学びの整理

栄中学校　「主体的な学びを育む授業づくり」　研究主任　實原　泰介 先生

○栄小学校と連携した研究体制づくり
○生徒が学びたいと思う課題の連続性を大切にし、複数回の体験活動の位置付け
○体験における改善点を見つけ出し、課題を更新する「総合的な学習の時間」を核としたカリキュラム
○生徒一人一人の課題を明確に据え、その課題解決に沿った授業構想

シリーズ　～新たな時代を切り拓く学び～

個別最適な学び

「自分に合った学び方」を一人一人が自覚して学ぶ授業づくり

戸倉上山田中学校３年生の理科「慣性の法則」の学習場面。担当の永田先生は、生徒が主体的に学べる授業づくりを大切にされています。

授業の前半では「基本の確認」として、体験を通し慣性の法則について理解しました。続く後半では「みんなで解く課題」として、学習カード内にある問題を解きました。用意された時間は 20 分、この間**どのように学習するかは生徒自身の判断**に任されていました。自身の理解が曖昧な部分を、友達に聞くことで理解を深めようとするＭさん。一方、一通り問題を解くと PC でジェットコースターの動画を視聴しながら、法則と生活経験とを関連付け「この部分は慣性の法則が当てはまるね」と友達と指摘し合うＦ君。他にも、ノートや教科書を参考に個人でじっくり考えたり、疑問について PC を使って調べたりする生徒の姿などがありました。

担当の永田先生は、生徒が**どのように学んでいるかを把握**しながら、理解が進まない生徒に説明してくれる生徒をつないだり、生徒の隣に座り**その生徒の理解度に応じた支援**を行ったりしていました。また、日々の授業における振り返りはもちろんのこと、定期テスト後にも自らの学び方と理解度を関連付けながら「自分に合った学び方ができているか」を振り返る場を設け、**生徒自身が学習を調整する力を育成**していました。子どもが自分に合った学び方を自覚しながら学習する永田先生の授業づくりに学びたいと思います。

社会に開かれた学び

“卒業してからも”よい学校にするために～最高学年としてできること～

八幡小学校６学年の入間川先生は、残り半年の学校生活の充実を願い、よりよい学校生活、充実した集団生活について考える道徳の授業を行いました。

教材「６年生の責任って？」（きみがいちばんひかるとき６　光村図書）

「ぼく」は廊下に置きっぱなしにされたぞうきんを見て、「最高学年としてできること」の話し合いで、「見回って片付けよう」と提案した。すると「それは美化委員会の仕事で、委員会の仕事をしっかりすることが６年生の責任だ」「自分たちが卒業したら元に戻るから、どちらが片づけるのも反対だ」という意見が出た。

自分はどの意見に共感するかを考えた後、友だちと「よりよい学校」にするためには、どうするのがよいのだろうと意見交流しました。“６年生は何もしない”と思える意見についても、その根底にある思いを考えていくうちに、一人ひとりが行動することが大切であると気づきました。やがて、集団の一員として責任を果たすことが大切だという考えにつながっていきました。「次の６年生が、４・５年生に教えられるように私たちがお手本になる。それがこれからの八幡小につながっていく」と、自己や学校の未来に夢や希望をもち、残された小学校生活を具体的に想い描く児童の姿がありました。

八幡小学校では、そのような子どもの姿を学級通信やホームページで発信し、家庭や地域社会と共通理解したり、今後の連携につなげたりするなど、社会に開かれた学びの実践が始まっています。